



特別審査委員賞 [高校生の部]

【世界-World-】の授業を世界規模で行うという発想は、雄大で夢があり、カリキュラムの具体性も併せて、未来への提案として非常に魅力的であるとして審査委員の心をつかみました。

世界中の子供たちがつながっていく

佐賀県立武雄高等学校 2年

野田 かれん のだ かれん

「グローバル化しよう」と日本では最近多く言われていますが、日本にはその体制が整っているのでしょうか。日本社会がどんどん国際的になっていく中で、私たちは本当に「国際化」を理解しているのでしょうか。私が気になったのは日本人と外国人の関係です。

私は今年の7月までドイツに1年間語学留学をしていました。そこで体験したのはアジア人とヨーロッパ人という人種の違いです。私はあらゆる面で外国人であるという扱いを受けました。それ以来、私は外国人という言葉の意味と差別についてより深く考えるようになりました。差別といっても種類はたくさんあります。肌の色で人を差別する。最近のニュースで白人の警察官が黒人の容疑者を射殺したことが大きな問題になるのも、差別に一因があります。また、世界規模で話をすると言語、文化や宗教など、違いはとても多く、差別も多く見つかるでしょう。

私は、人が差別をしてしまう原因は無知ではないかと考えました。その理由となったのが、私のヨーロッパでの体験です。街に行くと、私は日本人ではなくアジア人として見られます。そしてすれ違いざまに「中国は最悪の国だ」「アジアは貧乏だ」などの言葉を投げかけられました。これは明らかにアジアに対する偏見です。中国を例に挙げると、経済成長率は世界でもトップであり、工業技術、芸術の面でも世界的にレベルが高く、私たちの身の回りには中国から来たものが多くあります。また、日本にとってとても大切な存在であり、中国という国がなくては日本が成り立ちません。

無知が原因で偏見をするのなら、知ってもらえばいいのです。そこで私は教育に視点を置きました。現在の日本では、外国の事情を勉強する教科として地理と世界史があります。しかし、私たちは主にテストや入試のために勉強しており、これでは現在の世界を理解するというのは難しいでしょう。

そこで私が提案する解決策は、【世界-World-】の授業を行

うことです。小学1年生から高校2年生までの11年間、週に1時間行います。地理や世界史など、従来の授業では知ることのできない本当の世界を知り、世界中と関係を作る授業です。例えば、音楽を例に挙げてみると、各地域の伝統楽器、民謡などは音楽の授業で多少習いますが、いつ、誰が、どこで、何の目的で演奏するのか、専用の楽譜はあるのかなど、みんなが素朴に疑問に思うことは詳しく習いません。このような疑問や関心を、食生活、気候、季節のイベント、言葉、文化や生活の様子、習慣など自分たちが実際に知りたいこと、体験してみたいことをテーマに設定して、生徒に自主的に活動してもらいます。

なぜ今までこのような授業がなかったのでしょうか。グローバル化の大切さが広く謳われている現在、私はこの必要性を大きく感じます。この授業をするための教科書やワークブックを作るのは、確かに簡単ではないでしょう。しかし、時代は変わっています。タブレット端末や電子黒板などのインターネット環境が、学校の教室にも普及し始めています。インターネットは世界中を結びつける重要かつ簡単な手段となりました。こういった技術が進むことによって、世界に関心を持つきっかけと少しの英語力さえあれば、世界中から多くの情報を入手することが可能であり、さらに情報を瞬時に交換することも可能となります。こういった環境での教科書の必要性は今ほど重要ではなく、生徒たちが自分自身でそれぞれのテーマで活動を行うというように、自分たちでいろいろ調べながら進めていくことができます。

私はこの【世界-World-】の授業で、生徒の自主性も伸ばしていきたいと思いました。小学校低学年ではまず、世界にどんな国があるのかを知ることから始まります。言葉や気候の違いについて先生に授業をしてもらうところは従来と同じです。ただし、新しいことを学び始める際には必ず生徒に答えを想像してもらい、自分で考えてみることを重視します。テーマが終わるごとに、全員が自分たちのグループで作ったポスターなどを使って考えをみ

んなの前で発表することによって、小さいときから人前で自分の意見を伝える楽しさや積極性を身に付けることもできるのではないのでしょうか。

小学校高学年では、外国語には英語以外にもあるのか、見た目の違いはどうして起こるのか、どの地域にどういった特徴があるのかなど、低学年の時よりもさらに具体的に学んでそれぞれが発表します。また、グループに分かれ、1つの国について調べ、最後の発表会にはその国の人になりきってもらい、ほかの生徒と接する活動を考えました。先生にも1人で発表してもらい、生徒から評価してもらうのも面白いでしょう。中学1年生では世界情勢などを自分たちで調べ学習をし、発表し合って現在の世界や社会についての知識を深め、次の学年からの交流プログラムに向けた生徒同士のシミュレーションを行います。

授業の最終段階は、中学校2年生から高校2年生までの4年間で行う、世界各国との交流プログラムです。4、5人のグループを作り、1カ月間である国の1学校の1グループとプログラムを共同で行っていきます。同じクラスのメンバーでも、それぞれのグループによって違う国の人とつながりながら活動をしていくことになります。1カ月ごとにクラス発表会を行い、自分たちがその1カ月間で活動したことをお互いに学び合います。40人を1クラスと考えると、1カ月で8カ国(学校)、1年(約10カ月)で80カ国、単純計算で行くと4年間で320カ国の世界中にいる中学2年生から高校2年生に当たる年代の人とともに学べるということです。このプログラムの目標は、交流をするグループ同士での相互理解を深め、生徒同士の交友関係にもつながることで、どこかの国に自分と同世代の友達ができるという期待が授業に対するやる気にもつながることです。

交流テーマはそれぞれのグループで話し合って決めてもらい、テレビ電話などを使ってオンラインでまずは自分の国に関するプレゼンテーションをし、共通のテーマに対するディベートなどを行います。小学校の時から経験がここで活かってくるのです。また、授業以外でもメールでの意見交換や個人的な交流などを行うことによって、英語力の向上や世界中の人とつながっているというリアルな交友関係は、時間が経つにつれどんどん増えていきます。知り合いがいることやこれまでの知識により、差別や偏見の芽は減っていくでしょう。

このプログラムを実行するには、国連やユネスコなどの機関の協力も必要です。言葉の壁もちろん出てくるでしょう。授業中に話し合いをするときは、よりスムーズにするためにNGOを新しく設立し、グローバル企業からの支援といった形で通訳派遣をしていただいたり、Googleに最先端の自動翻訳を依頼して、各学校の電子機器に無償か格安の値段で提供してもらえる可能性もあります。テレビ電話などの世界をつなげるオンライン技術は、マイクロソフトやAppleといった世界的にも大手の会

社に交渉し、ディベート用のテレビ電話機能などの開発も依頼してみてもいいかでしょう。

それで問題がすべて解決するのかどうかは断言することができません。しかし、小さいことを少しずつ時間かけて積み上げていくことによって、世界は変わっていくと信じています。

[受賞者インタビュー]

互いを知らないことから
偏見は生じる
ドイツに留学して
感じたこととまとめた



——コンテストに応募した理由、きっかけは？

留学から帰ってきた私に、先生が「書いてみないか」と勧めてくださいました。

——論文を書き上げるまでにどのくらいの時間がかかりましたか？

構成を考える段階からだと、約1週間です。

——この論文を書く上で苦労したことは？

3,000字という字数制限にとっても苦労しました。

——この論文を書いたことで良かったことはありますか？

自分の考えを明確に文字として表すことができ、また、受賞して多くの方と知り合えたことがとても良かったです。

——今、どんなことに興味を持っていますか？ どんなことをしている時間が楽しいですか？

医療、国際社会、外国語に今はとても関心があります。部活動(吹奏楽)をしている時間がとても楽しいです。